

【学位論文審査の要旨】

近年、作業療法において「意味のある作業」という言葉が学会発表や論文で多く見受けられるようになった。本研究は、クライアント中心の実践とも関連するこの傾向がわが国の作業療法におけるパラダイムシフトであるのか、また、「意味のある作業」と表現する作業療法の支援の在り方が、どのような特徴的な内容を有し、どのように選択されるのか等の検討をすることで「意味のある作業」の概念を明らかにする試みである。

副論文1では、15年分の日本作業療法学会抄録をレビューして、意味のある作業とその類似の言葉の使用状況を主に使用頻度の観点から分析し、「意味」「重要」「価値」といった類似の言葉が1997年から現れ始めて増加する傾向にあることを報告し、日本の作業療法士がクライアントの持つ価値や作業に注目した新たなパラダイムを受け入れていく過程を示していることを示唆した。

副論文2では、過去15年分の事例報告を分析し、意味のある作業の特徴と意味のある作業以外の作業の特徴を次のように考察した。意味のある作業は性別・疾患・発症後その作業に従事するまでの期間を限定せず、成人を対象にしたものであり、クライアントの主観を反映した日常生活上の作業と訓練の項目に広がるものであった。その導入時にはクライアントの意向を大事にしており、情緒と作業遂行状態の改善を示すものであった。意味のある作業以外の作業は、導入時に作業療法士の考えに重きをおくものであり、その成果は作業遂行の改善よりも心身機能にかかわるものが多く示されていた。

副論文3では、さらに26の事例報告で用いられている「意味のある作業」の内容と特性を質的に分析し、7つのカテゴリーに集約されることを示し、その内の《自ら意思表示した作業》《生活史の中にある作業》《新たな自分につながる作業》を作業療法士は「意味のある作業」とみなす傾向があると結論づけた。

主論文では、これら一連の研究では示されることのなかった発達障害領域の作業療法士20名を対象としたインタビュー調査を実施し、5つのカテゴリーが抽出された。それらは《取り組む全ての作業》であり、発達障害領域の作業療法士はその作業を《親子のニーズと観察・評価結果から》見出し、親子の《楽しい生活の支援》に向け、工夫や段階づけをしながら、そして、《親子ともやっていると見えるようになる》ように、その作業に取り組み、生じる感情と経過を言葉で意味付けすることでその子の人生の基礎を創っていた。これらの「意味のある作業」は子どもと成人にも共通しており、自ら意思表示し、生活史に関係し、自分自身を（再）構築する作業であると結論づけた。

本研究目的は先行研究の十分な検討の上で明確であり、妥当な研究方法が用いられ、結果の解釈も公平かつ真摯に行われている。研究内容である作業療法士が用いる「意味のある作業」という概念をその使用頻度のみならず、使用の文脈に現れる成果やその特性を明らかにしたことは、作業療法支援の中核となりつつある概念の一つとして作業療法学の発展に寄与するものと考えられる。

博士学位論文審査の要旨

最終試験では、研究手法、考察概念、本研究の限界等についての質疑が行われたが、非常に真摯な態度で臨み、柔軟かつ明確な対応で適切に答えられていた。また、関連分野に関する十分かつ幅広い知識、研究者としての熱意、今後の展望を有していることも確認された。さらなる研究に対する意欲も認められ、総合的に、本研究領域の知見について深く理解していると考えられた。

以上のことから、本研究の趣旨および内容、そして質疑応答を総合的に判断し、本研究が博士論文に値すること、著者が博士の学位（作業療法学）に相当することを認める。